



青井奨学会を通してかなえる将来の形

青井奨学会は設立以後50年近くにわたり、将来世代の人材育成に努めてきました。奨学会の活動は、株主も含めたすべてのステークホルダーのための経営をめざし、将来世代との共創を加速させる丸井グループのインパクト経営と密接にかかわっています。現役奨学生の佐々木大祐さん、東出あんなさん、そして奨学会OGであり、現在は選考委員を務める堀江優美子さんの3人が、奨学会を通して思い出に残ったエピソード、将来実現したい夢について語り合います。

青井奨学会の事業内容

青井奨学会は、創業者 青井忠治が、「有為な人材を育成して社会に送り出したい」との想いから私財を投じ、それを基金として1973年に設立されました。最大の特徴は、奨学金が無償給付で返済不要という点です。これは、忠治の「事業の利益は社会から得させていただいたものであり、その利益の一部は当然社会に還元されるべきもの」「個人財産も世の中の役に立つことに使いたい」という信念に基づいており、運営資金は奨学会が保有する丸井グループの株式の配当金で100%賄っています。

奨学会の事業内容としては、①大学奨学金、②高校奨学金、③Aoi Global Research Award(青井交換留学奨学金賞)と

④交流支援の4つの事業があります。大学生・高校生が自由に学び、自分らしく自己実現できる場を提供しています。

青井奨学会の変遷

- 1973年 文部大臣の認可を受けて「財団法人 青井奨学会」設立
- 1974年 第1期奨学生決定(大学生15名、高校生11名の計26名)
- 2012年 内閣総理大臣より「公益財団法人」として認可される「高校3年時予約型・大学奨学金制度」を新規導入し、募集開始
- 2014年 「Aoi Global Research Award」(青井交換留学奨学金賞)を新設し、第1期奨学生として3名の大学院生に授与
- 2015年 新高校奨学金制度を導入し、第1期生の募集開始

これまでの実績

2021年に創立48周年を迎え、これまで給付した奨学金は約20億円を超えており、卒業生も1,588名となりました。2022年3月期は、給付額1億3,100万円(予測)、給付者数は197名と、いずれも過去最高となる見込みです。

青井奨学会の特徴の一つに、年1回の現役奨学生と卒業生が一堂に会する奨学生集会があります。金銭的な給付だけでなく、同世代や卒業した先輩たちとの交流を深め、それぞれが成長する場をつくりたいとの想いから開催しています。



奨学生と卒業生が一堂に集まり意見交換し、仲間をつくる年1回の集会

給付者数と給付額の過年度推移(公益財団法人移行後)

| | 2014年3月期 | 2015年3月期 | 2016年3月期 | 2017年3月期 | 2018年3月期 | 2019年3月期 | 2020年3月期 | 2021年3月期 | 2022年3月期 |
|------------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------------|
| 総給付者数(名) | 66 | 67 | 73 | 98 | 119 | 123 | 148 | 189 | 197 |
| 奨学金給付額(万円) | 3,384 | 4,206 | 4,474 | 5,506 | 7,290 | 7,380 | 9,104 | 12,332 | 13,100 (予測) |
| 新規採用数(名) | 14 | 21 | 26 | 38 | 40 | 40 | 55 | 70 | 61 |
| 大学生(名) | 13 | 20 | 19 | 22 | 31 | 28 | 41 | 61 | 52 |
| 高校生(名) | 1 | 1 | 7 | 16 | 9 | 12 | 14 | 9 | 9 |

数値で見る青井奨学会

累計卒業生数(創立以降) **1,588名**

累計給付金額(創立以降) **20億1千万円**



(写真左から)
堀江 優美子 青井奨学会OG 株式会社ポッセ・ニッポン代表取締役
佐々木 大祐 青井奨学会 大学3年生
東出 あんな 青井奨学会 大学3年生

青井奨学会との出会い

堀江: 初めまして、堀江優美子と申します。私は1998年に大学を卒業するまで、青井奨学会の奨学生でした。今回はOGという形で座談会に参加させていただきます。大学卒業後は12年間新聞社に在籍し、30代後半の時にロンドン大学大学院に入学して再び学生に戻りました。その後、国連機関やNGO勤務を経て起業し、今にいたります。また、現在は青井奨学会の選考委員も務めています。まずは、自己紹介と学生生活で取り組んでいることを教えてください。

佐々木: 佐々木大祐と申します。現在、僕は大学3年生で、AIな

ど情報系の研究を行っています。何か自分が興味を持てる工学の分野の一つ見つけて、そこにAIなどを手段として用いたアプローチをしていきたいと考えています。

東出: 東出あんなと申します。私も大学3年生です。遺伝子やDNA、遺伝学から動物や植物の構造や機能などを調べたり、タンパク質やアミノ酸などの勉強もしてきました。また、環境問題にも興味があり、環境問題の啓発に力を入れている「2020ミス・アース・ジャパン」に応募したところ、日本代表に選出していただけだったので、その活動も積極的に行っていました。

堀江: 最近は、新型コロナウイルスの影響で、奨学生集会や同窓会が開かれていないのですが、年2回送付される会報には必

ず目を通しています。東出さんは、会報で活動がたびたび紹介されていたので、ご活躍を拝見していました。日本には多くの奨学会が存在していますが、お二人が青井奨学会を利用しようと思ったきっかけは何でしたか。

佐々木:僕は岩手県出身なのですが、東京に出て一人暮らしをしながら進学すると、どうしても金銭的な負担があります。青井奨学会は無償給付で返済不要かつ、給付の金額も他の奨学会よりも大きかったので、応募しました。僕と同じように地方から上京してきた学生たちの中には、アルバイトに大きく時間を割いているケースが多いです。アルバイトに時間を取られず、自分のやりたいことや勉強に多くの時間を充てられるのは、本当にうれしいです。

東出:私は双子なので経済的な負担が同時に2倍かかるということもあり、奨学金を利用しました。応募する際の作文は、非常に時間をかけて書いた覚えがあります。大学1年生の時にサークルやアルバイトなど、学生だからこそできるいろいろなことに挑戦してしまって、肝心の授業に集中できない時期がありました。しかし、青井奨学会のことを思い出すと、自分が何のために大学に入学したのかということ思い出すことができます。そのくらい私にとって青井奨学会の存在は大きいものとなっています。

堀江:私も学生時代は同じように青井奨学会の存在に励まされていました。奨学生の集会で理事長のように社会的地位のある方々からお話を聞くと、「ちゃんと頑張らなくては」という思いになれました。

奨学生が抱いた将来の夢

堀江:自己紹介でも述べた通り、今は自分の会社を経営しています。12年勤めた新聞社を退職する時に相談したのは、奨学会の先輩お二人で、それくらい私の中で青井奨学会の存在は大きかったのだとあらためて思います。私は、ほぼ四半世紀前に大学を卒業したOGという立場ですが、お二人はまだ学生で、これからキャリアをスタートされる立場かと思えます。今後、大学生活で実現したいことや、将来実現したい夢はありますか。

東出:私は「ミス・アース・ジャパン」を通して、ビーチクリーンやゴミ拾いなどの活動に携わるようになったのですが、まわりの友だちとも一緒に行いたいと思うようになりました。SNSなどを

活用しながら、そのような環境に対する活動が若者の間で波及していくような機会をつくっていきたくて考えています。また、堀江さんのように、いつか起業にもチャレンジしてみたいです。**佐々木:**僕は大学院には進学する予定ですが、博士課程には行かずに修士課程で卒業して就職しようと考えています。現在、工学部で勉強しているので、そこで学んだことを活かして、世の中で多くの人に使用していただけるような製品の開発などに携わってあげたいなと思っています。その夢が実現したら、非常にやりがいになると思います。

堀江:お二人が今後やりたいことがよくわかりました。お二人とも、自分が信じることに向けて、しっかり勉強しながら進んでいられると思います。社会人を続けていると、よく理事長がおっしゃっている「前向きに」とか「健康」とか、「感謝」といったことが大事だと感じているので、そういったことを念頭に置いてほしいなと思います。話は少し変わりますが、現在は、新型コロナウイルスの影響もあり、非常に変化が激しい時代だと思うのですが、その点についてどのように感じていらっしゃいますか。

佐々木:大きな変化によって、新しいものが創出されるという点においては、自分にとってプラスのことと考えようとしています。今後、自分が何か新しいものをつくることになった際、その周辺や社会が変革している時であるならば、それに対応した製品をつくれれば良いと考えています。そして、できる限りその変化を利用して、自分がつくった新しいものを社会にねじ込んでいければいいのではないのでしょうか。

東出:ミスコンテストの参加には、数カ月の海外滞在が必要なもので、通常であれば学業との両立が難しかったと思います。ところが、新型コロナウイルスの影響で、審査がオンラインとなったので、大学を休まずに済みました。また、以前よりもNGO団体などが海外の人とリモートで交流できるイベントを多く開催してくださったので、世界中の人たちとの交流が広がりました。変化は悪いことばかりではないので、良い点に目を向けるようにしています。

堀江:お二人のお話から、変化を前向きにとらえ、今後につなげていける可能性を感じました。東出さんは海外との交流にも興味を持たれているということですが、視野を広げるという意味では、若い時には実際に海外で働くなど物理的に動くことが有効であるといわれています。しかし、挑戦を続けているうちに、ある程度経験を積むと場所に関係なく自分の中の世界を広げら



れる感覚を得られる時があります。これはコロナ禍で海外への渡航が難しい時だからこそ、忘れずにいてほしい考え方です。

これからの将来世代に向けて

堀江:お二人が今後の企業に期待することを教えてください。**佐々木:**社会の変化にともない、企業も変わっていかねばならないと感じています。近年、「世界規模でこの課題を解決したい」といったスローガンを打ち出して、大々的に広告を出しているにもかかわらず、社員の働く環境や待遇が整っていないといった問題も存在していると感じています。SDGsを掲げる以前に、身近な社員に対して行動を起こすことが必要ではないでしょうか。丸井グループには、昔から「社員は家族」という考え方があったと聞いています。そういう意識が今こそ必要で、所属しているメンバーに対してもしっかりとサポートする企業が増えていくといいのかなと一学生としては思います。そのような会社に入社したいですね。

東出:私は「ミス・アース・ジャパン」でも、SDGsやサステナビリティ、エンカルなどにかかわる活動を行っていたので社会課題解決などに興味はありますが、佐々木さんのおっしゃるように、言葉だけ掲げている企業が多いように感じています。利益

を上げるのが企業であると思うのですが、サステナビリティやSDGsを真に実践している企業が増えることを願っています。

堀江:私は起業した立場として、その組織に集まる人たちがそれぞれの能力を最大限に活かしていける場づくりをしたいと思っています。理事長が「21世紀は本物の時代」と長らくおっしゃっているように、この時代は本物が本物になれるチャンスにあふれていると思います。青井奨学会には、単に金銭面だけでなく、そのチャンスを獲得するための機会の提供やサポートしてくださる人たちの存在があります。お二人を含め、奨学生の皆さんと一緒に新しい時代をつくっていきたくて考えています。

東出:そうですね。私もあらためて、奨学会などを通じて、さまざまな人の力を借りるということは大切なことであると思います。未来の奨学生にも、変わっていく世界だからこそ、そういった力を利用し、楽しさを大切にしながら新しいことに挑戦してほしいです。

佐々木:何事においても、最初の一步を踏み出すところは自分でやらないといけません。奨学会もそうですけれど、自分から進んで調べてみると、思ったより多く、助けの手が差し伸べられているのを実感できると思います。自分自身も含めて、将来世代の皆さんは、早め早めに自ら一步を踏み出すことに重きを置いてほしいなと思います。